

Loynes, Christopher (2018) What would a post humanist, post growth outdoor education practice look like? *Japan Outdoor Education Journal*, 21 (2). pp. 45-47.

Downloaded from: <http://insight.cumbria.ac.uk/id/eprint/4538/>

Usage of any items from the University of Cumbria's institutional repository 'Insight' must conform to the following fair usage guidelines.

Any item and its associated metadata held in the University of Cumbria's institutional repository Insight (unless stated otherwise on the metadata record) may be copied, displayed or performed, and stored in line with the JISC fair dealing guidelines (available [here](#)) for educational and not-for-profit activities

provided that

- the authors, title and full bibliographic details of the item are cited clearly when any part of the work is referred to verbally or in the written form
- a hyperlink/URL to the original Insight record of that item is included in any citations of the work
- the content is not changed in any way
- all files required for usage of the item are kept together with the main item file.

You may not

- sell any part of an item
- refer to any part of an item without citation
- amend any item or contextualise it in a way that will impugn the creator's reputation
- remove or alter the copyright statement on an item.

The full policy can be found [here](#).

Alternatively contact the University of Cumbria Repository Editor by emailing insight@cumbria.ac.uk.

日本野外教育学会第二十回大会 ワークショップ1

What would a Post Humanist, Post Growth Outdoor Education Practice look like?

Dr. Chris Loynes

経済成長主義・人間中心主義後の野外教育実践とはどのようなものか？

クリス ロインズ

皆さんこんにちは。このワークショップでは私の話を聞くだけでなく積極的に質問をしてください。途中、ディスカッションをしてもらいます。各グループで話し合い、知りたいことを是非聞いて下さい。

昨日、教育の話として「第3のスペース」が出てきました。他の2つのスペースについては、1つは「学校」に関連するもので、もう1つは「コミュニティ」でした。そして「第3のスペース」は野外教育に関係するものです。これについては色々な可能性が考えられます。20世紀においては、この第3のスペースを各国が活用し、国内社会において様々な働きかけをして色々な関係性を生み出してきました。これからの社会は「それぞれの国の社会」ではなく「世界の社会」という考え方が必要になります。そのためには経済的な成長だけではなく、環境との関係に配慮した上手な成長でなければなりません。日本の野外教育について、このような観点から色々教えていただけるとありがたいです。今日取り上げたいのは、これからの日本そして世界について考えながら（例えば人口動向など視野に入れながら）、日本での野外教育にどのようなチャンスがあるのかということです。

現代は皆が多様なライフスタイルを持っているので、個人の状況に合わせた活動機会を創出することが大切になってきます。例えば、イングランド大学の教育において、当初サイクリングは野外教育ではありませんでした。しかし、

この活動は山中でも行動でき、個人的に続けることもできます。また、世界ではスポーツとして人気があり有名なスターも生まれています。若い人は皆、サイクリングのやり方を知っているし、健康維持にもつながります。ここで重要なのは、楽しいからこそサイクリングが好きになるということです。環境教育的な視点からだけサイクリングを野外教育に導入したのではなく、楽しみや人気があるから導入したのです。つまり一側面からだけでなく、楽しさと環境配慮の双方から捉えられています。しかし、これには環境負荷の高いこともやらなくてはいけない場合も生じます。この点についても皆さんから意見がもらえればと思います。

ここからは皆さんにディスカッションして欲しいのですが、今の話を踏まえて自分たちの意見や質問を出し、その中から一つ発表してほしいと思います。

【質問】ボーイスカウトは軍隊のような厳しさと野外教育の楽しさが対峙している部分もあり、時に子供達が離れていってしまう。そのような時にはどのようにすればよいか。

厳しさと自由どちらか？というより、相互に補完的だと思います。バランスが大事です。OBS 創成期の話ですが、当時は海軍のように規律を重んじる海の専門家と自由奔放な山の専門家の集まりでした。別世界の二人が力を合わ

せ、山の自由と海（軍）の厳しさが合わさったのです。各組織で培われた伝統は少しずつ変わるものです。現代社会では、新しいアイデアやクリエイティブな考え方といった自由さが求められると共に厳しさもより一層重要になっています。両方があることにより社会に良い影響が出てくると思います。また、ある研究は厳しさが全くない家庭の子供が普段にない厳しい活動を行うことにより効果が得られることを示唆しています。いずれにしても、うまくいくためには子供たちが自ら選んで参加することが大切です。

現在は「平和」や「性別」などに関する考え方はとても大事にされています。ボーイスカウト、ガールスカウトなどの組織でもこのような考えを生かしていく時代になりました。これらは国際的組織なので、国の枠組みを超えても良い傾向だと思います。

【質問】 私たちの団体では参加者が毎年夏に265 キロのマウンテンバイクや登山、乗馬体験をする。イギリスではこのような形態のキャンプは実施されているか。あれば様子を聞かせて欲しい。

宿泊を伴った教育をすることが一番意味のあることです。皆が集まることが大事で、一回だけでなく複数回参加することも大切になってきます。繰り返し参加すると仲間や先生たちと一層仲良くなります。また、学校のスケジュールと合わせる等、学校との連携をとることが大切です。仲間と力を合わせて問題を乗り越える活動があり、これは学校と家庭での時間とは少し違うと思います。real world learning というヨーロッパでやっているプログラムがあります。将来は予想し難いです。野外教育経験を通じてより柔軟になり生きる力が育まれると考えます。22歳になったときにどのような仕事があるかわからない状態で5歳の子をどう育てていくのか、という指導をしなければなりま

せん。ただ教えるのでなく柔軟な子供を育てることが大切です。

現在、野外教育経験から学ぶシステムはできていますが、もっと広く「教育」でも考え方が変わってくることを望んでいます。野外で学習するほうが教室で学習するよりも多くなることを願っています。フィンランドの高校生たちは野外で何が必要か見つけて、そのために何をどのように学ぶかは学校に戻って勉強しています。第3スペースとしての野外教育でおきたことが第2スペース（学校）に戻っても忘れられていません。

これからの教育の発展のために必要なことが野外教育にはあります。ヨーロッパでは、働く日を週4日にしようと検討しています。ロボットの登場で人の仕事が減ってきているからです。これからはテクノロジーがさらに発展し、仕事が減り、生活の中で満足の仕方が変わってきます。

【質問】 第3スペースをもう少し詳しく教えてほしい。

「学ぶこと」について、家庭で行われるものが第1スペースでの学びとなります。第2スペースは学校によるものです。これにあてはまらないのが第3のスペースであり、そこには自由度の高い学びがあります。学校や家庭より自由があるので、自分にとって責任を持つことができるし、自分にとって新しいスキルを身につけることができます。デューイによると、この第3スペースというのは子供が自分にできることに合わせて学ぶことができ、将来の自分ではなく現在の自分に合わせて学ぶことができるとしています。それぞれのスペースが大事な役割を持っていて、この3つが孤立するのではなく良い関係を保つことが大切です。心配なのは第3のスペースを誰が作るのかということです。イギリスでは昔より家庭教育ができなくなってきました。日本もそれに近いのではないで

しょうか。家庭の教育時間が減ってきている分、この第3のスペースの活用が大事になってきています。

【質問】 山に大勢で行く活動ではどうすればよいか？

ゼロインパクトだけではなくて、ポジティブインパクトをしようと思っています。例えば、登山のはじめに若い木があるので、それをもって途中で植えることができます。その環境によってポジティブインパクトを与えることができるのではないのでしょうか。

イギリスを含むヨーロッパは滞在型キャンプをメインとしています。他方、旅（移動型キャンプ）も大事です。イギリスは世界を探検してきた国なので旅には人気があります。しかし、この二つには全く違った効果が生じることがわかっています。子供達が責任をもって自分たちで旅をします。例えば、私が関係した中学校は1年生の時に自分たちでグループを作り、ルート・食事等も決めて、ほぼ自分たちだけで行う活動をしました。また、2年間一緒に旅を含む活動をするという国際的な機会もあります。まずはイギリスで一緒に勉強・活動をして、その後ノルウェーに行き現地の生徒たちと活動し、最後はドイツに行きます。経験を積むにつれ自分たちで行く場所を決めることになっていきます。ある生徒は日本に来たこともあります。このコースの良いところはそれぞれの国を厳しく見ることができることです。他の国にいくと国家間の違いに気づくことができ、また、その国の生徒と活動することによっても様々な文化も感じることもできるのでとても良い機会だと思っています。近年は国際化が進んでいますので、とても良い機会だと思います。旅をする前と後の自分では世界を見る視点は大きく変わります。昨日、デニース先生も話したのですが、今現在の考え方より、今後どのような世界にしたいのかという未来の考え方に

自信を持ってほしいと思っています。また、世界を旅して様々な考え方に触れることが世界の未来を作っていくのだとも感じています。

もう時間がなくなってきました。皆の話を聞けなかったのですが今夜のパーティーにはいます。質問や話したいことがある方はその時に声をかけてください。今日は本当にありがとうございました。

通訳：John Andrew Loynes